

『学会見聞記』

第51回欧州糖尿病学会に参加して

51st Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes (EASD)

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科医科学専攻
細胞代謝栄養学 修士課程2年

酒 井 友 梨 子

2015年9月14日～18日、ストックホルムで開催された第51回欧州糖尿病学会 (EASD) に参加し、発表の機会を得ましたので報告いたします。

ストックホルムは「北欧のヴェニス」と称される、水の景観の美しい都市であり、「魔女の宅急便」のモデルになった街としても知られています。運河沿いに建つ市庁舎では、毎年、ノーベル賞の晩餐会が行われることでも有名です。街を歩けば、水と緑の恵みに溢れ、高齢者の穏やかな笑顔を垣間見ることができ、健康長寿の社会にとっても近い環境だなと実感しました。

EASDは、糖尿病学の進歩・発展を図る最高峰の国際学会の一つです。例年、ヨーロッパだけでなく130を超える国々から、医療関係者や研究者等、1万5000人以上が参加します。会場のStockholmsmässanは専用の駅がある程広く、大小合わせ7つのホールに分かれ、糖尿病新薬や最新のインスリン製剤等のトピック、インスリン分泌や抵抗性、血管合併症等に関する基礎研究の成果、患者教育に関するセッション等、多彩なプログラムが行われていました。フレンドリーかつカジュアルな装いの参加者が多く、活発な質疑応答が印象的でした。演題採択率はポスター発表を中心に約60%、口演は10%前後の狭き門です。国内ですら一度も学会発表をしたことのない私の演題が、口演に採択され(てしまい?)、このような華やかな学会で発表の機会を得たことは、忘れ難い出来事となりました。

学会初日から驚きと戸惑いの連続でした。テレビ番組のスタジオのようなスピーカー専用ラウンジに招かれ、専門のスタッフによるスライドのアップロードから、顔写真の撮影まで行われ、緊張感が一気に高まってきました。さらに、1000人収容の大会場で、6名のスピーカーの顔写真と演題名がスクリーンに大きく写し出され、独特の雰囲気が漂っていました。初日の夕方、「DPP-4 inhibitor anagliptin alleviates lipotoxicity-induced hepatic insulin resistance and steatohepatitis in mice」というタイトルで発表を行いました。本来、消化管ホルモンであるインクレチンの分泌を促し、血糖を低下させるDPP-4阻害薬が、インクレチンを介さない直接作用を介し、肝臓の脂肪蓄積とマクロファージの活性化を抑制し、インスリン抵抗性と脂肪肝炎を抑制させることを報告しました。

10分間の発表自体は、焦ることなく練習通りに話せたのではないかと思います。しかし、残り5分間の質疑では、4, 5人の異なる国々の研究者から次々と質問を受けました。英国訛りの強い英語や、余りに速いアメリカ人の英語を聞き取るだけで精一杯でした。それでも、海外仕様の高い演台に立つと、背の低い私はすっぽり隠れてしまったせいでしょうか、座長が優しい英語に言い直し、私の精一杯の英語に我慢強く耳を傾けてくれ、いつの間にか、和やかな雰囲気に包まれていました。私を含め全員がDPP-4阻害薬に関する発表であり、ホットな研究分野と

して、今後の展開が注目されていることを実感しました。

本学会の最大の目玉は、EMPA-REG OUTCOMEという、即日、New Engl J Medに報告された大規模臨床試験の成績発表でした。5000人近い参加者が詰め寄せ、会場は入場制限がかかる程の賑わいでした。心血管リスクの高い2型糖尿病患者において、新薬のSGLT2阻害薬が、プラセボに比べて、心血管死を38%減少させたという成績が報告されました。近年、心血管イベントを抑制させる血糖降下薬の報告がない中、発表スライドが1枚進むごとに、会場からは感嘆の大きなため息が漏れ、拍手が巻き起こりました。限られた国際学会でしか聴くことのできない発表を、ライブ感一杯に、楽しむことができました。それ以外にも、一流の研究者や優れた臨床家の発表を拝聴できたことは、発表のスキルや構成を学ぶ絶好の機会となりました。

初めて参加した国際学会では、数多くあるシンポジウムや広大なポスター会場、製薬企業の華やかな展示ブースに圧倒されました。そして、自身の未熟さを痛感すると共に、次の機会は、自ら活発な議論を交わせるようになりたいと、強く刺激を受けました。発表までの2月余り、入念に準備を行ってきました。ネットでTEDを見ては、イメージトレーニングもしました。毎週根気よく練習につきあって下さったラボのメンバーに改めて感謝いたします。

会期中の中央駅周辺のホテルはあっという間に満室となってしまったため、郊外の住宅街にあるアパートメントを借りました。電車を乗り継ぎ、毎朝40分かけて会場に通いました。アートの駅も、車窓からの何気ない風景も、市場やスーパーに並ぶお惣菜を吟味する帰り道も、毎日がとても新鮮で、今でもすぐに思い浮かべられます。

このような貴重な経験を得ることができたのは、日々、楽しく研究を行える環境と、先生方や先輩方の心のこもったご指導によるものであります。今回、ストックホルムでの発表の機会を与えて頂きました本学関係各位に厚く御礼申し上げます。

